〝現象〟をとらえるな

重んじたい生活体験

東京12チャンネル　修旅の座談会放送

東京12チャンネルでは三月二十七日午後十一時十五分から「争点・騒点」〝異議あり修学旅行〟と題するテレビ座談会を放映した。出席者は全修協山本種一理事長、旅行研究家農林省食糧研究所の西丸震也栄養化学研究室長、司会は作家の野坂昭如氏。以下はその座談会のあらましである。

発想は経験学習

野坂　いまの修学旅行は旧態依然たるものがある。なにか新しい形のものが出来ていいと思うが。

山本　疲れる旅行は意味がないと思う。しかし現象だけとらえてそれが無駄だといい切るのは皮相的な見方だ。それが大きな人間形成という目的上、必要かどうかで決定するのではないか。ごく一部分の形態で、古いとか、無駄だとかいうのは酷である。

野坂　昔はレベルが低かったから修学旅行というものが必要だった。また、経済的なゆとりのあるものが少なかったから、この方法をとったのだという意見があるがこれはどうだろう。

山本　私はそうは思わない。経験学習によって人間をつくるという発想から出たものだ。

西丸　それでは名所旧跡を見て回わるのではなく、しつけとか公徳心とか、人間形成のための旅行ということかしら。

山本　私にいわせるならば修学旅行は即生活である。その場について生活体験をすることであって小学校六年、中学校二年は一生に一度しかないのだから同じ年齢で同じ集団で移動する生活に深い意義があるのだ。

西丸　同じ年齢の集団旅行もよいが、旅が民族大移動のようなものでは無意味で、何も得るところはない。団体訓練が必要なら禅寺の修養、あるいは寮生活で結構である。

山本　はげしい時代に即応したビジョンを、この際、打ち出す必要がある。このような大切な教育行事を取りあげて人間形成の場として活用するようにしてほしいと思う。旧態依然というのは当事者の怠慢からきていることだ。

西丸　全修協はどんな仕事をしている団体か。

山本　全国小中高校の修学旅行の実態調査にはじまり、その指導助言、目的地の開発などだ。学校から実社会へ飛び出して移動する生活を営む、つまり旅行という形態に大きな意義を認めているのである。俗塵にまみれるというが、見知らぬ土地で独立個人の立場から教育される―これが修学旅行である。

西丸　修学旅行は先生が企画をたてるのか、旅行業者がやるのか。

山本　構想は学校でたてるが、見学場所などについては子どもたちが意見を出してまとめている。

野坂　旅行という行為には価値あるが、かけ足旅行や集団移動では学習的効果はあがらないと思う。

山本　観察移動を主とする教室という考えかたをあまり重視したくない。宿題とか稽古ごとに攻められている子どもたちが、せめて旅行中だけでもゆっくりと、ゆとりのある姿にしたい。それが理想的な旅行なのだ。

西丸　たしかに解放感を味わうのはよい。

山本　修学旅行が万能であるとは思っていない。もちろん修学旅行だけが人間を作るものとはいえぬ。

野坂　さいきんセット旅行が普及しており、新婚旅行から修学旅行にまでみんなセットされているが、義理で見なくてはならぬ場合もある。これは困ったことだ。

山本　家族とともに旅行しても学校でいく旅行の目的は果たし得ない。アメリカのナショナル・エデュケーショナル・アソシエーションという機関では、日本の修学旅行の姿について絶賛している。個人主義の発達した国ではこのような教育スケジュールは許されないからだ。日本の修学旅行を羨望しているという。

野坂　修学旅行の理想像とはどんなものか。

山本　小学校のときに基礎訓練し、年齢のすすむにつれ同好会的な色彩を味して展開すればよいと思う。よく宿舎での枕投げの話が出される。このような無駄を省くことなど今後、検討されねばならぬが、といって無駄のように見えるなかにも重要な要素を持つことがある。教育は効率的なものでなければならぬが、その実態についても深い観察が必要である。

西丸　個性も失われ、習慣に従って行なわれているだけのようだ。例えば奈良、京都の寺を見ても子どもたちは理解できぬだろう。しかも近頃のようにバスでかけ回わることが多くなってはなおさらである。そして居眠りばかり…これでは何が残るか。

山本　修学旅行であるから最初にたてた計画通り見学するのが本道である。

野坂　なにからなにまで見ようとするところに無理があるのではないか。

横顔

駿府城の西郷どん

＝全修協静岡県支部長＝

木村愛一氏

○…駿府城の西郷隆盛といわれる木村愛一氏。巨大な体躯で天下をへいげいしているあたり、まさしく静岡県の生んだ教育界の逸材である。今様西郷どんといわれるゆえんは、太っ腹で、しかも緻密な計画で実行するところから来ているためであろう。

○…全修協の県支部長として修学旅行の指導や教職員の厚生運動に挺身、夏の研修旅行にも思う存分に手腕を発揮、毎年ウナギのぼりの好成績をおさめており、ことしの募集結果が全国から注目されている。

○…静岡師範卒、県内小学校などを歴任後、県教組中央執行委員長に就任、現在県学生協理事長、互助組合理事など教育関係団体の要職もつとめている。五十六歳。

本年の事業決る

研修旅行友の会

東京都支部

研修旅行友の会東京都支部（池沢弘人会長）では三月二十九日午後、全修協本部に役員懇談会を開いた。池沢会長、白滝副会長、鎌田重吉、宮坂延次、加藤為治各幹事のほか鹿志村亀吉、山寺圭子さんら会員多数が出席、本年度の研修旅行には友の会としても積極的に応援、会員獲得に全力をあげることを申しあわせた。春の総会は四月二十六日午後一時から千代田区の科学技術館で開くほか、二学期には一泊旅行、三学期には懇談会をそれぞれ催すことを決めた。閉会後、研修旅行の思い出の写真などを見せ合って楽しい一ときを過した。

〝〃〃〃

ハイヒールにご注意

ヨーロッパ旅行記 ⑭

岡本　仁

パリは北緯四八度に位置する。北海道の最北端が四五度であることと比較すれば、メキシコ暖流の影響はまことに偉大である。私が立寄った六月十七日―二十日のパリは、阪神間でいえば五月中ごろの気候で、まことに温和、花のパリにふさわしいものであった。

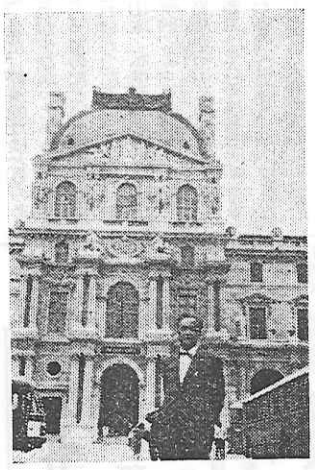
パリに直結する私の想念は、ヨーロッパの概念の中核であるということと、フランス革命とナポレオンということになる。そうして先年日本にきたミロのヴィーナスをルーブル美術館にみにいきたいということであった。

セーヌ河に影をうつしたノートルダム、モンマントルの丘のサクレクール寺院の広場からのパリの眺望など絵葉書でおなじみであるが、ルーブル美術館の前から、カルーゼル凱旋門を背にしてチュイルリー公園を透し、コンコルド広場のオリベスクとエトアール広場の有名な凱旋門を一直線に結ぶ眺めはパリそのものというべきである。

パリのガイドの説明を通して意外に感じたことは、ナポレオンをフランス第一等の国民的英雄として誇らかに礼賛すること、都市計画、美術的感覚において保守主義を固執していること、メイド、清掃人夫などの職業を蔑視し、フランスの自由主義も限界のあることなど、やはり意外であった。

さらに驚いたことがルーブル美術館でおこった。〝ハイヒールはご遠慮下さい〟ということである。婦人は室内でも帽子をとる必要がなく、レディ・ファーストの国において、ハイヒールをぬがなければ、ルーブル美術館には入れないのであった。ハイヒールの尖ったかかとの先きが大理石の床を傷つけるからで、二フラン（約百五十円）だして、備え付けの履物を借用しなければならない。なかなか思いきった措置である。カメラはフラッシュをたかなければ撮影は自由。わが国の美術館では必らず撮影禁止である。カメラは美術を傷つけないが、ハイヒールは傷つけるから駄目ということであろう。

ルーブル美術館の見学時間も極く僅かである。ダ・ヴィンチのモナリザ、ミレーの晩鐘、ミロのヴィーナス―この三点だけは必らずみてやろう。他は時間許すかぎりだと計画をたてていった。すべては予定通りであったが、モナリザが、小さな作品で色彩も渋いのが予想外であった。ミロのヴィーナスに再びめぐりあえたことに感動を覚えて嬉しく思った。



ルーブル美術館の筆者

日本人、一寸待て

イタリアは観光の国である。古代ローマ、ポンペイの遺跡、ルネッサンスの作品、水の都ヴェニス南の海と北のアルプスーまことに観光資源にめぐまれている。ヨーロッパ旅行をする人に対して、イタリア人は観光ずれがしているし国貧にして乞食多く、人間はとかくずるがしこいから注意するようにと説かれてある。随分失敬な話だと思うが、私の短いイタリアの旅の体験では、肯定も否定もできないが、私自身は何の被害もつけなかったし、悪い印象もない。

観光は国の大きな財源であるらしく、入場券は政府発行の同じものを使用し、入場料は色々違いがあった。たとえばポンペイ遺蹟一〇五リラ（約六十円）ウフィツィー画廊一七五リラ（約百円）で、わが国の入場料と比較してむしろ安く、薄利多売によるのであろう。

カメオはイタリアの土産としてヴェネツィア・ガラス、皮細工と共にその三傑であろう。日本人、日本人一寸待てーの呼び声を、私はローマでもナポリでも、ポンペイ遺蹟のバス停留所でもきくことができた。観光にきた日本人に対して、イタリアの土産、なかんずくカメオを売りつける大道商人たちのたくましき商魂なのである。カメオ一個千円だという。二、三千円はするものらしく、それが千円であるからには、プラスチックの模造品かも知れない。私は遂に買わなかった。

補助イス無しバス

私たちは、ロンドンより汽車でハーヴィクに来て、そこから船で六月二日、ドーバー海峡を渡り、オランダ領のホック・オブ・ホーランダで観光バスにのり、以後ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、フランスを回り、六月二十日パリのオールリー空港を旅立つまで、実に四、四三二㌔の道のりを走破するヨーロッパ・バス旅行を行なったのである。四、四三二㌔とは、北海道の北端、稚内から日本の南、鹿児島までの往復に相当する長い道程なのである。

一日で一番長距離を移動したのが、ローマ、ポンペイの往復五〇四㌔だったが、日本でいうなら名神高速道路なみのサンロードを時速八〇㌔で飛ばすのだから、走っている時間は知れている。高等学校の修学旅行に似ているが、ホテルに早目についてくれるのと、バスの構造が違っていて、割合につかれない。

ヨーロッパの観光バスには補助イスを設けていない。日本の観光バスで補助イスのないのに乗り合わせたことがない私にとっては、この点、感心した。料金をそれだけ高くとればよいので、コセコセする必要はなかろう。

もう一点、日本と違うのは、マイクがガイド専用であって、乗客の座席に回して歌がうたえるだけのコードの長さに余裕がなく、コンセントも前方にしかついていなかった。私たちの一団四十名は中部・近畿の人々で、飛行機ではじめて一緒になったばかりなので、自己紹介のために、各人がガイドの席までいかなければならない不便さがあったが、時間の間隔がとれたり、顔見せのできる利点もあったのである。

運転手のフロント・ガラスの前には、お守りのお札も人形もなく奥さんと子供の写真がおいてあり、この運転手は、英仏独伊西の五か国語が話せるということであった。

（財団法人全国修学旅行研究協会常務理事・尼崎産業高校長）

万葉史蹟めぐり ㉒

近江大津宮

旧都への哀感こめて

堀田　勇

斉明天皇崩御（六六一）後、しばらく称制のまま国政を見られた中大兄皇子が、飛鳥から近江大津宮に遷都されたのは六六七年の春であった。ついで皇子は翌年一月即位された。天智天皇である。

大化改新の推進者であった天智天皇の治政は、精力的で勇断に富んだその努力にもかかわらず、かならずしも国民の結集的な共感は得られなかった。近江遷都自体も、飛鳥地方の旧勢力からの離脱・新羅征討の失敗にともなう自衛が理由だったとされている。

しかし、そうした内治外交の波乱含みの中においても、近江令の制定・大陸文化の導入など天皇の治政は新時代にふさわしく絢爛たるものでもあった。

にもかかわらず、近江大津宮は壬申の乱（六七二）を境にして急速にくずれ去り壊滅してしまった。僅か五年余の帝都でしかなかった。皇位継承のもつれが原因で骨肉相食む死闘の結果だったことも悲惨というほかはない。

○……

壬申の乱後二十年たって、荒廃にまかせられたこの旧都をおとずれた柿本人麻呂は

玉だすき　畝火の山の　橿原の　日和の御代ゆ　生れまし　神のことごと　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめしけむ　天大和をおきて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに　思ほしめせか天ざかる　夷にはあれど　石走る　淡海の国の　楽浪の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　こと聞けども　大殿は　ここと宗へども　春草の　茂く生ひたる　かすみたる　春日の霧れる　ももしきの　大宮処　見れば悲しも

反歌

楽浪の志賀の辛崎幸くあれど　大宮人の船待ちかねつ

楽浪の志賀の大わだ淀むとも　昔の人にまたもあはめやも

とうたった。人麻呂の傑作の一つであるが、長歌では春霞の中に荒漠たる荒廃した旧都への悲愁を枕詞・対句などを連らねた巧緻な表現の奥に畳みこみ、反歌では辛崎の松・志賀の入江を介して悲惨な終末であった近江朝廷への哀感を訴えている。

万葉集屈指の旅の歌人高市古人も次の秀歌を残している。

古りにし人に我あれや楽波の　古き都を見れば悲しき

楽波の国つ御神のうらさびて　荒れたる京見れば悲しも

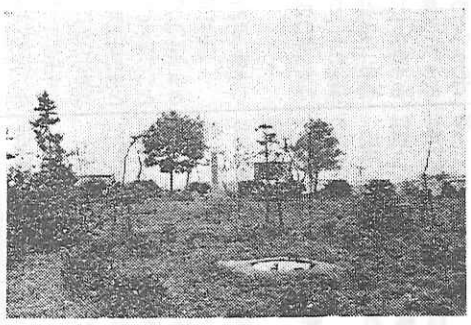
荒廃した旧都を見て悲しいのは自らもここで生活した「古りにし人」だからであろうというのであればその宮跡のいやつぎつぎに知らしめしけむを　天にみつ　あをによし　天にみつ　ひたる　かすみたる　春日の　ももしきの　大宮処　見れば悲しも　楽波の　大宮人の　楽波の　辛崎幸くあれど　船待ちかねつ　楽波の　大わだ淀む　昔の人に　あはめやも

のは、荒然とたたずむおのれの姿を逆説的にとらえたのであろう。"近江の国神の心が荒れ怒って荒廃した京"というのには素純な万葉人の信仰を背景にした歎息がにじんでいて、私達の心もまた氷っていくようである。

○……

近江大津宮跡に擬せられている南滋賀町は、琵琶湖にむかってゆるやかに傾斜している田園らしさのまだ失せていない住宅街である。明かるく平安で、散在する集落の造型された美しさはもう壬申の乱の陰惨な終末の風情も人麻呂や古人を悲しませた荒廃の影も全くない。

もし近江大津宮をのしぶよすがを求めようというのであればその宮跡と伝えられている京阪坂本線南志賀駅に近い梵釈寺駅を訪れるよりほかはない。ここには巨大な礎石が残っている。



（随筆家・写真も、写真は大津宮跡に擬せられている梵釈寺跡）

楽しい世界一周

船の旅行記

藤原　忠

寒波のおかげで世界一周へ

昨年十一月十三、十四日、ボストンで開催されたアメリカ細胞生物学会に出席中、日本ではちょっと想像もつかぬ猛烈な寒波に見舞われて健康を害し、気候があたたかで変化もゆるやかなヨーロッパに飛来したのがキッカケで、とうとう四万㌔に及ぶ世界一周旅行になってしまった。健康に気をつけながらロンドン、アムステルダム、パリを通り、それぞれの大学を訪問し、一月二十八日、マルセイユからフランス汽船カンボジュ号にのった。

この船は排水量一万五千百五十㌧、速力二〇―二一ノットという旧日本海軍の甲級重巡洋艦なみの優秀船で、ブリッジには電子コンパス、自動操縦装置、自動航路修正装置などがあり、航海中はブリッジに人影を見ず、また、完全冷暖房、海水蒸溜器のおかげで水は使い放題、風呂も温泉なみに二十四時間、いつでも入れる。

生活費は船旅のほうが格安

海水の風呂に入ったり、スコールのなかへわざわざと突入したり……いずれも昔物語りで、陸上生活とまったく変わらない。タービン機関の上に動揺防止装置をもっているので、少々の風にも揺れないで正確に一日四百八十カイリを航海している。日本まで四十五日だから、飛行機になおして陸上生活費を考えるとき、ニューヨーク―東京往復よりはるかに安くつき、貧乏な公費在外研究員たる私にはもってこいの、文字通り渡りに舟だった。

船には二月二日、セネガル共和国のダガールに入港、同四日赤道を越えて南半球に入り、針路を南東にとって二月十日正午、希望岬の沖で針路を北東に転じ、二月十二日、南アフリカ共和国のダーバンに入港した。ダーバンはアフリカにもこんな所かーと驚くほど美しく、これに匹敵する所は日本にはなく、ロスアンゼルスのハリウッドかビバリー丘くらいのものかも知れない。

二月十三日、再び熱帯に入り、印度洋は文字通り油を流したようで、気温は三〇度に達している。明十六日、アフリカ最後の寄港地ケニアのモンバサに入港する。いまはもはやモザンビークをすぎ、タンザニアとケニアの沖を北北西に進んでいる。このあとポンベーコロンボ、シンガポール、バンコック、ベトナム沖を通って香港経由、三月十二日午後四時頃、神戸へ入港の予定だ。

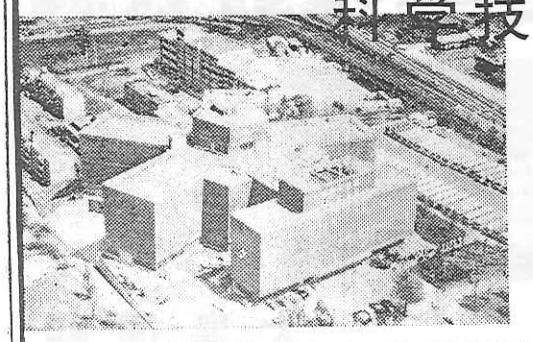
フランス船の特色は昼食と夕食にブドー酒がタダで飲み放題ということで、大いに悦に入っているわけだ。タバコその他もロンドンパリの三分の一の価格（無税のため）で手に入る。食事は名にし負うフランス料理なので、いささか量が多すぎるが、味は米英船より遥かにおいしい。英国やフランスで、日本の商社やメーカーの社員からうらやましがられたが、全く金のいらない贅沢だといえるだろう。三等のことはさっぱり判らない。三等と一、二等は完全に隔離されているからだが、一、二等は毎日音楽会と映画会があり、週に一、二度はダンス・パーティがあり、全く退屈しらずだ。まことに結構な天国である。（ケニア・モンバサ港の船中で）

★

藤原忠氏（大阪市教職員互助組合理事、大阪市立大学医学部電子顕微鏡研究室勤務）は昨年三月、大阪市立大学在外研究員として電子顕微鏡的分子生物学研究のためアメリカに留学、このほど一年ぶりで帰国された。以上は同氏から全修協本部に寄せられた旅行記である。

100万人の修学旅行コース　★　★　★　★

科学技術館



修学旅行の教育的意義を高めるためにも、ぜひ科学技術館をコースにおいれください。

● 冷暖房・団体休憩室（400名）・食堂（300名）完備
● 無料大駐車場（大型バス50台）

お問合せ…東京都千代田区北の丸公園　科学技術館業務部　TEL東京(03)212－8471(代表)

★地下鉄（東西線）：竹橋下車　★日本武道館となり

親切な宿…閑静な庭園と落付いた雰囲気のホテル

国立公園定山渓温泉
国際観光旅館

香取

TEL　定山渓2351～4
テレックス（946）707